◆連載 いま留萌むかし 第二十八話

●留萌沖三船遭難 ～終戦悲話～

留萌市内を一望に見おろす千望台の丘に一つの慰霊碑が建っている。この慰霊碑にはこう記されている。

碑文

昭和二十二年八月二十二日、早暁の海は北西の風小雨霧視界を覆う。

この日、小笠原丸、第二新興丸、泰東丸の三船は戦乱の樺太より緊急疎開の老幼婦女子乗組員五千八十二名を乗せ、留萌沖にかかりしが、突如潜水艦の雷撃砲撃に遭い、瞬時にして沈没或は大破し千七百八名の尊き生命を奪う。

畢生の地、樺太を脱し数刻夢に描きし故山を左舷にしてこの惨禍に遭う悲惨の極みなり、

星霜ここに十七周年我等同人この碑を建て永く精霊を祈念す。

昭和二十年八月十五日、日本は太平洋戦争に終止符を打った。国内では敗戦に伴う混乱がいたるところで続いていた。樺太も例外ではなかった。八月九日のソ連の参戦から一九日の戦闘停止まで、ソ連軍の進行は続いていた。

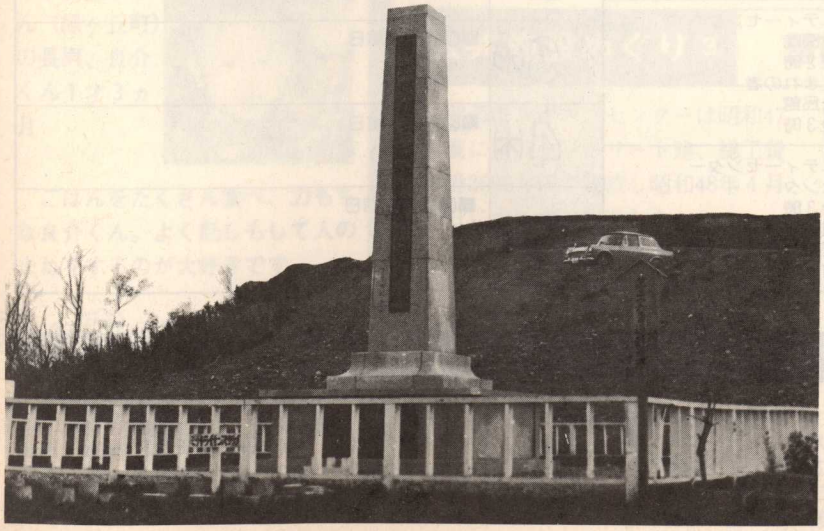
敗戦に伴う引揚命令により樺太住民は大泊、真岡、本斗の各港に終結し、引揚船に乗る順番を待っていた。八月二十二日の日ソの一般的停戦協定が締結されるまで、老人、婦女子の優先的な引揚は続いた。しかし、この最後の引揚船に悲劇の幕が切って落されたのである。魔の八月二十三日、留萌沖の三船遭難の悲劇である。

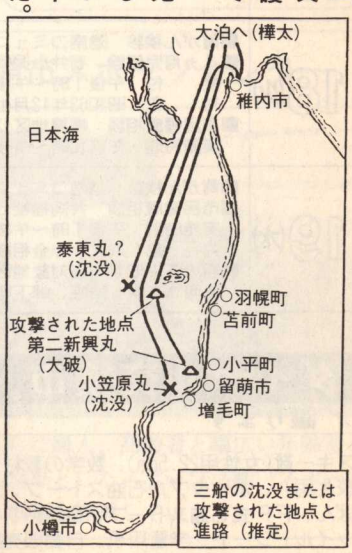
逓信省海底電線敷設船、小笠原丸は樺太からの緊急疎開の任務にあたっていた。大泊で引揚者を乗せ、稚内に入港し、小樽を経由し、秋田県の船川港に向けて航行していた。二十二日午前四時、増毛沖で潜水艦の雷撃を受け、沈没。

第二新興丸、海軍特設砲艦兼敷設艦、二十一日午前九時、三千三百六十人ほどの避難民を乗せ、大泊を出港した。この船は最初稚内に入港する予定であった。しかし、大泊を出港してまもなく、陸上輸送の関係で予定を変更して、小樽港へ向かうように指示された。午前四時すぎ、潜水艦による魚雷攻撃を受け、右舷を大破。その上、傷ついた第二新興丸へ向けて浮上した二隻の潜水艦から機関銃が放たれた。必至に防戦する第二新興丸は一隻の潜水艦を轟沈し、やっと難を逃れた。傷ついた船体は傾きながらも留萌港に入港したが、その船上の惨状は目を覆うものがあったという。

特設砲艦、泰東丸は七百八十人を乗せ第二新興丸より少し遅れて大泊を出港し、同じく小樽へ向けて航行していた。瀕死の重傷を負いながらもやっとの思いで留萌港にたどり着いた第二新興丸が負傷者の救護にあたっていたころ、泰東丸は鬼鹿沖にさしかかっていた。午前十時であった。突然の潜水艦の砲撃により沈没し、六百六十七人が死亡または行方不明となった。

終戦一週間後の悲劇はいまでも人々の胸のなかに深い傷として刻まれている。特に留萌の市民としては忘れがたい事件ということができよう。





三船の沈没または攻撃された地点と進路（推定）

平成元年4月／発行・留萌市
編集・企画 振興室
印刷・白鷗印刷株式会社
1989 4